三河アララギ

２０１９年８月 葉月 はづき

八　月　号

第 六十六 巻　　第 八 号

ニューヨーク日記（154）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

SOUK MEDINA MARRAKECH

Blue Shoe Diaries

ヤッホー！モロッコのマラケシュに来てます！モロッコと言えばやっぱりスークでお買い物でしょ。ジャマ・エル・フナ広場を通って迷路のようなスークに入りました。ここはスパイスのスークで私の目当てはラスエルハヌートのスパイスブレンド。このスパイスを使うとなんでもモロッカンな味に早変わり～。美味しいよ！ついでに黒い石鹸（オリーブで出来てる）やアルガンオイルも買いました～

We are in Marrakech! First time in Morocco! And what do you do when you're here? You go to Jemaa el-Fnaa and enter the maze-like souk! Here we are in the spice souk, buying some ras el hanout which is a blend of spices that make everything taste very Moroccan! And some black soap just because it seems to be the thing to get in Morocco. After pure argan oil.

目次

第六十六巻第八号（通巻七八八号）

表紙・カシュー　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（154）　Blue Shoe（2）
アカンサスの徑　御津　磯夫（4）
ははきくさII　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
はゝきくさII　河原　静誠（7）
海路　岡本八千代（8）
神武より　弓谷　久子（10）
金銀砂子　今泉　由利（12）
露草　安藤　和代（14）
今日吹く風に　清澤　範子（15）
揺れる世　伊藤　忠男（16）
バラの水　森岡　陽子（17）
ルーペメガネ　白井　信昭（18）
電子辞書　阿部　淑子（19）
麦秋　山口千恵子（20）
慈愛　杉浦恵美子（21）
ベトナムフェティバル　矢崎　直人（22）
ツル　夏目　勝弘（23）
『ことよせ』　いーはとぶ　鈴木美耶子（24）
吉見　幸子（24）
牧原　正枝（24）
石田　文子（24）
森　厚子（24）
山崎　俊子（25）
三田美奈子（25）
水野　絹子（25）
牧原　規惠（25）
稲吉　友江（25）
現代学生百人一首　東洋大学
立山　陸（26）
水野あかり（26）
福島安也奈（26）
越川　櫻（26）
井田　真綾（27）
倉木　遥都（27）
桑田　晟（27）
井土　遥空（27）
森岡　陽子（28）
贈呈誌
童謡　長崎の鐘は鳴る　高橋　育郎（30）
『俳句』
柳田　晧一（32）
重野　善恵（32）
山迫　京子（32）
山元　正規（33）
森岡　陽子（33）
松本　周二（33）
田中　清秀（34）
浜田　紀政（34）
今泉　由利（34）
今泉　如雲（35）
杉浦　弘（35）
植村　公女（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
山本紀久雄（40）
今泉　雅勝（42）
江上　浩二（44）
かさね吟行会
『酔いの徒然』（88）
楽しい時間（81）
絹の話（105）
「江上浩二の独り言」
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（46）
平井　茂行（48）
中屋　保之（50）
大橋　望彦（55）
夏目　勝弘（56）
岡本八千代（57）
漢詩研修（三十四）
奥の細道　奥州へ其二
夜を利用する
「クズ」あれこれ
「氷魚」のことから（223）
編集室だより（二〇一九年六月）
今泉　由利（58）
野菜・まんだら（18）（59）
「三河アララギ」について（60）

アカンサスの徑

御津磯夫

一日の夏の安居とわれ言ひて山の暑きをかたみとぞする
競ひあふこころ無かりし人ゆゑにもつとも暑き日を山にゐる
石巻は厳(いはほ)くすしき神の山のぼりあへぎて巌にのぼらず
文学の興りすたれもわれ知らずまたもよむ憶良の六十七首
ゆきて見ぬ因幡伯耆を地図の上にわれはさまよふこの三朝四朝
つひにわが読みきたりたり五頂はるかに望みて覚えず涙をながす
草を分け蔓を切りつつよたよたとジンジャーたわみて匂ふところまで
わが村を美都(みと)とも書きし代もありき御津(みと)がよろしも古く新らし
梢よりこぼれおちくるこまかきものびんばふふかづらの花の終りか
白沙をうがちし雫の跡ならぶ竹の葉の先のままにならびて

ははきくさII

大須賀寿恵

見積書また請求書六枚を整へて五〇〇円の県費おり来ぬ
献立カード二百六十例が完成し今日研修会に手渡すばかり
閉会の時刻々と迫りつつ研修会の発表要項のズレ直しゐる
人事異動の極秘文書の下書を焼却炉にてわれは焼き捨つ
血色素量が半ばに足らぬとスモン病の吾は献血断られたり
スモン病やみつつ彼岸過ぎとなり店に足温器をわがさがすなり
ボニーテールに結ひし二人の処女子が吾が教育事務所に採用され来ぬ
秘密会議夜々に続き今宵また足いたみつつお茶汲みをする
異勤の中のひとりの君を憶ひつつ一覧名簿の原紙切りゆく
傍にいますのみにて心和む市川先生吾が副長となる

歌集「續草々」

今泉米子

わが薮に祭りの笹竹六十本伐るとし云へど見にゆきもせず

紅梅の今年の梅干一つ入れて老の二人の朝々の粥

夕ぐれにとどろき過ぎし地震あり吾は白粥を煮つつゐにけり

病室のフェンス覆ひてちりばめて白すがすがと烏瓜の花

変りなき庭の雑草と言ひながら今年ことさら姫踊り子草

夜の燈に荘厳白くかがやけり清まり坐る阿弥陀像の前

入覚寺の御堂の階を降（くだ）るとき十四夜の月高くのぼれり

子どもらの遊びのごとく埋めおきし庭千坪の花曼珠沙華

本堂の大屋根葺き替へに奉るわが名かかれし瓦一枚

夕ぐれの庭に飛石掃きてをり一粒二粒雨らしきもの

はゝきくさII

河原静誠

矢作川の砂に深々と埋もれて藤田木山の石柱のあり
僧風のみだれし頂に興りたる浄土律をぞ究めむとする
律院の成りし昔をしたひ来て紫雲和尚の像にむかひぬ
水打ちて塵一つだに見えざりき昌光律寺の庭の笹の葉
伊賀川のほとり近くに今もなほ律風きびしき昌光寺あり
「藤田本山道場」と石文のこる大聖寺に今日また老僧の「宗史」をききぬ
漏八の明星あふぎ仏前に梵綱戒序をひとりひもとく
吾を育てしいくたりの人みまかりて残りたまふは盲ひたる伯母
出山の釈迦の画像に粥を供へ漏八の朝に梵綱誦す
わが実家に帰る道さへ違へたりわれにすぎゆきし十有余年

海路（うなぢ）

蒲郡　岡本八千代

刻々と令和の日日のすぎゆきて久しぶりに歩む海への小道

来てみれば稲生（いなう）の海の昼の海はろけき海路のただただ白し

白波は近きにさへも白々（しろじろ）とわが前にさへその白光り

娘らのいざこざ聞けば哀しけれ梅雨の間のこの夜半過ぎつつ

梅雨の間の一夜（ひと）の明けてまたわれに何事も無き心のごとし

啄木の妻節子の歌思ふかな「明日帰るとて三日経ぬ」の歌

老いづきてまた深刻に思ふことありつつ活（く）らすも仕方なきかも

何ごとも恕(ゆる)せたまへよ神々さま忘れてしまふ心になります

だんだんと晴れ間に陽(ひ)ざすけふの陽よその淡き日ざしの美しきかな

「美味(おい)しいね」と己れに言ひて即席のコーヒー飲みてゐる昼餉のわれかな

今日からは今年も玄関に飾らむよ紫陽花描きたる漱石の絵ハガキ

羽生善治の「簡単に単純に考える」本また読みつつこの短夜夜(みじかよよ)

短夜(みじかよ)のわれにすぎつつこの深(ふ)けに冷めし白湯のむあはれひととき

流れゆく夜々とは言へ今もなほ君との縁(ゑにし)果てしなきかな

果てしなき天(あま)つ夜空のいづくにか必ずわれを見て在す君

神武より

豊川　弓谷久子

令和となりてはや一ヶ月老いの身は新年号に未だ馴染めず

神武より昭和までの年号を暗記したりき学生時代

田辺聖子さん死去のニュースが流れたり同年なれば思いは深し

愛読せし小説本の数々の軽快にしてユーモアありき

幾度も読み返へしたり紀行文「おくの細道芭蕉の足あと」

紫陽花の花うなだれぬ梅雨どきと思えぬ今日の暑さの中に

水やりに今日も追はれるさし芽よりすべて育てし紫陽花なれば

思い出も未練もすべて投げすてむ和服をすべて処分し終える

本棚の本束ねつつ終活とは重きものよと身に染み思う

五年生になつたあゆちゃんのパジャマ裁つ我の身丈とさして変らず

寸法がぴったりだったとあゆちゃんから手紙届きたり嬉しくなりぬ

中天に赤味帯びたる水無月の満月ぽっかりうかんでをりぬ

腰骨のわずかなずれが原因と診断されてよりひと月たちぬ

痛む腰庇ひながらのこの一ヶ月漸く痛み和らぎ来たり

焦っても詮方も無し薄紙を剥ぐようにと母の言葉を憶う

金銀砂子

東京　今泉由利

清らなり管弦の音(ね)につつまれてお星さまきらきら金銀砂子

知る限り宇宙を思ひ描きつつお星さまきらきら空から見てる

あのこともこのこともまた聞き下さる釈迦如来像彫りつづけゐる

自らの諸手もて印相を確かむる釈迦如来像定印のところ

菩提樹の下(もと)にて瞑想の御姿よ彫り進みゐる近付きゆかむ

一枚の衲衣(のうえ)を御身にまとはれて薄々き絹絹の襞(ひだ)彫る

自らを自ら救済してをりぬ檜角材彫りつづけゐつ

父のように母のようにと憧るる今日も明日(あした)も明後日(あさって)も

旧き家大き家族を守らるる凛と立ち立つ母を見上げき

故里とブエノスアイレスとの二万キロ離るることを深く思はず

「行くな」と父「すぐ帰るから」と私日本い出ゆく日のありき

四万キロの航空チケット常に持し故里の父故里の母

日本への北米上空飛行中母を亡くしぬお母さんお母さん

入念にストレッチをしてをりぬ巨き植木鉢運ばむ目論見

正面も右側左側背面も私の窓にはクレーン高し

露草

豊川　安藤和代

弓張の山脈の緑濃くなりぬ田畑に人の動き見え始む
草刈機の田植え準備の音高く蛙もせわしつばめもせわし
網を張り父との手植えを思いつつ八列植えゆく機械見ており
事もなくひと日の過ぎてカラス啼き染まる夕日に心和めり
藤揺るる下の砂場に園児等の高き山あり長き川あり
志げさんの逝きてひととせ上野坂今年も清しつゆ草の咲く
どもまでも母は母です古稀の娘の帰宅遅きを案づる白寿
「麺がいい」「カレーがいい」と日曜日孫の注文ボケてはをれぬ
久びさに母の実家を訪ひぬればなつかし森よ栗の花咲く
歌詠みがありてひと日が充実す下手でもよろし紫陽花の咲く
体調の悪しき私を知りゐてか今宵老犬は静かに眠る
青田風下校の児等の声のせて吾がキッチンは華やかとなる

今日吹く風に

春日井　清　澤　範　子

前立腺ガンと狭窄症を病む夫が気弱なわたしを励ましくるる
家族三人ささやかな暮し今吾は頑張る心なりただ一心に
右にポケットの飾り付く服あな涼しショルダーかけてシルバーカー引く
梅雨晴れ間増築したる出窓より陽は差し始む今日は晴天
半袖にまた長袖と梅雨の日の今日も幾度か着替へをぞする
熱中症に気をつけ気をつけリハビリにシルバーカーを引きて歩みぬ
夫の補聴器やっと買ひたりうれしくて今日は二回目の調整にくる
補聴器も声が出るなり調整は空気電池をパチッとセット
補聴器にやっとなれたり夫は言ふ価格のとおり相応なりと
緑濃き堤（つつみ）の桜の下蔭を歩みゆく吾にさやさやの風
堤防の桜は緑の濃く深く葉陰に大きく包まれて行く
夫の髪丸く刈りあげ爽やかに今日吹く風にふんわりゆらぎぬ

揺れる世

大阪　伊藤忠男

民と民誰かれ無しに輪の中に和心しめす阿波おどりなり
栄光への架け橋今や語り草待ち遠しきやオリンピック
山の中ぽつんと住まう一軒家秘めたる過去に驚く謂われ
三両の列車が走る田園に咲くは変わらぬ紫の花
右母校左大学懐かしや木々の緑に初恋の味
五平餅みたらし団子旗揺れるここは豊橋駅前広場
穏やかな梅雨は嵐の前触れか今なおよぎる昨年のこと
河川敷き寂しく咲くや小菊花命僅かか明日の雨まで
手術数競う電話の彼の声明るくどこか誇らしげなり
また手術ここで尽きるも悔いなしと語りし友から復帰の電話

バラの水

東京　森岡陽子

駅前のアパート並ぶ坂道はいつも止るは引越しトラック
花屋では母の日過ぎしカーネーション特価で売られる何故か侘しき
薫り来る緑の中の薔薇園はプリンセスミチコマサコの薔薇咲く
巣立ちした三羽の燕不安気な幼い飛翔さけよカラスよ
紫陽花の間々に入り込む十薬は背丈越え咲く紫の間々
散歩どきハンバーガーの看板に誘われ食すチーズバーガー
薔薇庭の冷やして売るはバラの水香り高く味は水
神社には富士の溶岩据え置かれこま犬親子の勇気と愛情
六月の満月の名はストロベリームーン赤みさしをり今夜六月

ルーペメガネ

豊川　白井信昭

解体作業単管触るじわじわと伝わりくるは太陽温もり
田植えすみなよなよ稚苗ふく風の心地よきかな神野新田
車庫の奥土盛りのわがサルスベリハコマキ共に二年たちたり
二本の根の活力にと買い置きの液体肥料水で薄めやる
三月目のようやくにしてハコマキの葉替の遅き新芽いできぬ
御堂山見回りの道今日変えてまだ見ぬ方の榛の木訪ねむ
見回りの山頂歌碑の茜さす木漏れ日のなかひかり鋭し
初夏の清しき今朝の角口にバラの蕾は悉く赤
父の日わが娘より贈り物ルーペメガネあり難くうく
この月の歌稿整理にルーペより変えて役立つルーペメガは

電子辞書

横浜　阿部淑子

早苗植る田んぼの緑いや増して蛙の合唱フォルティッシモに

独吟の勧めに乗りて「偶成」を気張りて夫はご機嫌帰宅

紫陽花は今年も優しく咲き揃う屋主は入院開(あ)かぬ窓淋し

電子辞書娘に借りて調べゐるスペル追うより重い辞書勝つ

はやぶさ2生命の起源に迫れるか期待大きく二度目の挑戦

麦秋

豊川　山口千惠子

暗がりに頬にとびくる蚊の羽音けんとうつけて打ちつけてをり
夜半めざめ蛙の声をききてゐるわが家のまわりの田に水はられ
道をへだて休耕田の麦畑麦秋の原明るく続く
時わすれ野に遊びしもはるかなり自転車にゆく麦秋の道
切りつめし柿の木の切り口より淡きみどりの若葉の萌えくる
サボテンの小さき赤き花の咲く五月といへども暑き日続く
早々とダチュラの花の咲きにけりま白き花の花の辺に寄る
食卓の上にとりきてさしておく一輪ざしにどくだみ一本
鉢植えのピンクの斑入りの紫陽花が娘(こ)より届きぬ母の日のプレゼント
取りためて洗ひてのきにつるしおくどくだみ茶つくらむ今年もまた
どら焼を持ちて息子の夜来たる出張帰りに寄りてみたると

慈　愛

蒲郡　杉浦恵美子

葉隠れの赤き実たわわユスラウメ母が好みし庭の一本
ユスラウメかれこれ十個摘んだりわたし以外は鳥のご馳走
色こそは愛でたけれどもユスラウメ口に含めば野生の甘み
大空をトンビ悠々旋回す飽かず眺むる我が所在なさ
健二叔父は我が亡き父を慕ひしと通夜の席にて初めて聞けり
誰も居ぬこの家に独り繙ける母の日記の幼きわたし
下ぶくれ又一段と膨るると我がおたふく風邪を母は記せり
カーチャンノトコヘイキナと蝉二匹逃がしけるとぞ弟三歳
綴りしを亡き後娘がこの日記繙くことなど母思ひしか
平凡な人にてあれど若き母我等姉弟に慈愛極まる
遠くまで行ったつもりの我なれど家族の世界をさほど出てない
古本の壷井栄を求めたり青森市なる蔵書印あり

ベトナム フェスティバル

東京　矢崎直人

代々木の夜今宵はベトナムハノイの夜波の歌姫調べよろしく
ベトナムの人形劇の面白く西日の暑さのみにあらずや
美智子様雅子様あり愛子様ゆかりの薔薇の旧古河庭園
庭園をわが物顔でゆく猫に魁夷の白馬重ねてみたり
自分にもアートな写真撮れるかもライトアップの薔薇の微笑み
別人のように変身新郎の写真に友と顔を見合わせ
友だちの結婚式の乾杯の発声まかされ声のふるえて
花菖蒲江戸より今に名を残す平和の証し思ほゆるかな
菖蒲田の電車が行くも絵になりぬ東村山北山公園
雨降りて駅に乗り合いシャトルバスおばあさんたちにぎやかなこと
雨降りてお団子安く売り始め行列できる花より団子
忘れてはならぬ沖縄慰霊の日６・２３令和になるも

ツル

豊川　夏目　勝弘

ツルといふ言葉に良き思ひなしツル草多し我が屋敷には
生垣を這うツル草を引き寄せるそのツル先に金ヅルはなし
根魂を持つツル草は絶やし難し成るがままにと引きて切りゆく
クサフジにツルニチニチソウにツルソバにと我が家の石垣はツル草の緑
野面積みの我が家の石垣は細き長き蛇のすみかぞ頭の出でをり
石垣に簾をなせるツルソバの淡きピンクの花玉の色
石垣を家を被ふニシキヅタ今は締め紅葉を楽しむ
生垣を被ひ宙に伸びゆきし三本のツル縄となりつつ
細きツル一本を植しジャスミンに今は手に負ず無謀に繁る
シメゴロシのフジヅル絡む桧あり背戸の桧原は静もりてをり
植物も蛇も人間も哀しかり締め殺す術をもちてゐにけり
カッコウは托卵ツルは立木にと人間は代理母にと種をつなぎゆく

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

若きらにまぎれ降りゆく原宿駅ここからわたくし明治神宮へ
神宮の杜に楠の落ち葉舞ふ私の髪に二ひら三ひら

鈴木美耶子

風薫るゴールデンウィークにわが庭の木々を切りたるは八歳の孫
連休に令和の響き漂ひて孫らと過ごす穏やかなる時

吉見幸子

ひざもとへ即位の朝刊さしだしぬ施設の母のくひいる目元
いつしかにはんぺんに竹輪は常備肉西浦の味「蒲サ」とぢるのか

牧原正枝

満開のこでまりの下を散歩する伊良湖岬の和風の宿の庭
竹の子の柔らか煮しめさくさくと今宵いただく友よりの味

石田文子

いくつもの小さき真白のはつ花を咲かせて柚子の花々の枝
預かりし君の苔鉢に霧を吹くたしか明日（あした）は君はフィレンツェか

森厚子

清里から絵葉書届くたくさんの思ひ出に令和元年と書かれて
アサガホを六本植ゑるこの朝紅白青にとりどり咲けよ

山﨑俊子

形原神社の神馬の菊の御紋章はつなつの光に輝きてをり
いつしかに夫の形見の花鋏わが手に馴染みて皐月の一花切る

三田美奈子

ぼつねんと大き体を竦ませて保護犬独り談笑の外
誰からも顧みられぬ保護犬を「草のようだ」と新菜は言ひぬ

水野絹子

わが畑の瓶の中には水なきにヘビとカエルが共に住みをり
渇水の放送しきりわれもまた天にまかせし農作業かな

牧原規惠

わが読みたる本の一枚そよ風に捲られてしまうこの昼下り
伊勢路へと古稀の旅行に参加する皆の笑顔は十五歳のころよ

稲吉友江

現代学生百人一首

東洋大学

ミンミンと鳴くせみの声変わらずに少しだけ高い奄美の秋空

鹿児島県立大島高等学校三年　立山　陸（りく）

縁側でアカショウビンの音を聞きつ祖父の隣で寝たあの夏よ

鹿児島県立大島高等学校三年　水野あかり

寮生活一歩歩けば友の部屋喜び悲しみ持ち込みＯＫ

慶応義塾ニューヨーク学院（高等部）十二年（アメリカ）　福島安也奈（あやな）

国境を越えて聞こえる母の声どんなときでも大切な人

慶応義塾ニューヨーク学院（高等部）十年（アメリカ）　越川（こしかわ）　櫻（さくら）

《小学生の部》

海行けばキラキラガラス落ちてると海も輝き宝石のよう

コロンビアインターナショナルスクール六年（埼玉県）井田真綾（いだまあや）

同点だおのれの力しぼり出せ残り8秒フリースローで

印旛郡栄町立安食台小学校六年（千葉県）倉木遥都（くらきはると）

プールでてゴーグルはずすと目がパンダみんなが笑うパンダの国を

堺市立新浅香山小学校六年（大阪府）桑田晟（くわたじょう）

ぼくの家鬼も魔王も住んでいる父母弟なかなか強い

堺市立深井西小学校六年（大阪府）井土遥空（いどはるく）

贈呈誌

森岡陽子

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○水辺に咲くむらさき色の花菖蒲都おどりのはんなり芸妓　安川敏子

○冬の陽にリンゴの皮が干し上がり紅茶に入るる香り広げて　横田晴美

冬雷　7月号

○行く春の平成の御世を惜しみつつ一夜の明けて令和を祝う　永田夫佐

○地下足袋に腰袋を提げたる女庭師が足取り軽く脚立に上がる　高松美智子

○白河なる小峰城へと辿りつき修復なりたる石垣見上ぐ　飯嶋久子

○かきつばた色鮮やかに咲きはじむ朝露にぬれつんと伸びつつ　豊田伸一

○「令和」持つつやある響き思ひつつシャリシャリと玉砂利を行く　松本英夫

月虹　６月号（１２８号）

○その家に住む人の影見えねども木香薔薇は季節に咲き継ぐ　水上信子

○黒鳥は冬のすみたる湖に細き枝すくひて水辺にそっと置く　井村喬泉

○偶然の如く過ぎ行く風ひとつされど確かな殴打のやうに　横山鈴子

○縄状の熔岩みたり大冨士が大き昔に吐きにけるといふ　鮫島　満

○真昼間の道を横切る小さき影仰げば尾長の空へと昇る　山口京子

鹿児島アララギ　６月号

○三万匹の鮎の放流始まりて甲突川に初夏の訪れ　中尾千賀

○清水涌く池のめぐりの石だたみに洗ひて白き大根並ぶ　樫平頼子

○花終へし木香バラが日日に散る令和元年の五月となりて　益山苣子

長崎の鐘は鳴る

高橋育郎 作詞

1

宇宙をめぐる　人は見る
ひときわ光る　あの星は
あれは地球　美しい
伝えてゆこう　この喜びを
平和のくらし　みんなで守ろう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

2

あの日のことは　忘れない
ひらめきおそう　まぶしさは

あれは原爆　きのこ雲
惨禍極みて　涙もかれる
永遠(とわ)の平和を　みんなで守ろう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

3

憎しみ遠く　消え去りて
ひたすら願う　めぐる春
花は咲き染め　鳥は飛ぶ
尊きみたま　導きたまえ
平和への道　みんなで歩もう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

『俳句』

樹齢重ね百日紅の骨董めく　重野善恵

目高泳ぐ燗跡古き火鉢かな

揚梅の落ちし染み跡嘆く僧

田園のコントラバスや牛蛙　山迫京子

泥のうえ浄土広ごる蓮の池

太陽に光に親し夏帽子

衰へぬ日差しとどめて百日紅　山元正規

山の日は粗き緋の色凌宵花

けふもまた変らぬひと日さるすべり

三味の音や橋のたもとの夏柳
読経終ふ古刹の門の百日紅
砂利音のくぐもる梅雨の女坂

森岡陽子

百日紅二泊三日の宿の窓
工場の煙溶けこむ梅雨ぐもり
真竹の子一本筋を通すなり

松本周二

本堂に響く読経や百日紅
山門にそぼ降る雨や額の花
梅雨寒にひと声残す黒鴉

田中清秀

ランドセルおろし道草百日紅
ベランダに蒲団を運ぶ梅雨晴間
語らふか思ひ出多き芋焼酎

浜田紀政

天麩羅や今咲き満つる花南瓜
散り積る常磐木落葉また一葉
ひとり居に守宮一匹加はれり

今泉由利

浪江から移りし蔵や濃紫陽花
郭公や津軽平野の空広く
よく晴れし津軽や江戸は五月雨と

今泉如雲

掛けかへる虎渓三笑夏館　　杉浦　弘

三五弁あり十薬の咲き盛る

長靴にひとつ潜めて実梅採る

麦秋やかくれんぼしてそれっきり　　植村公女

夏空のはじっこらしき我は点

名物の団子買う列日雷

かさね吟行会
「旧古河庭園」　六月

田中清秀

イングリッド・バーグマン、カトリーヌ・ドヌーブ、マリア・カラス、プリンセス・ミチコ、クイーン・エリザベス、クリスチャン・ディオール、クレオパトラ、アブラカダブラ、ラ・フランス、芳純、朱玉、紫雲、乾杯、などすべて薔薇に付けられた名前である。今回の吟行会で訪れた旧古河庭園には多くの素晴らしい名前の薔薇が咲き揃っていた。令和元年六月十四日、梅雨晴れ間の絶好の吟行日和となった。

旧古河庭園は東京都北区にある庭園で、大正八年に古河虎之助男爵の邸宅として造られ、洋館、西洋邸園、日本庭園が整えられ、現在国の指定文化財（名勝）に認定されている。東京都が借り受けて一般公開されており、薔薇の名所として多くの人に親しまれている。

梅雨晴や薔薇園通る乳母車　紀政
「初恋」てふ真白き薔薇や紅ほのか　京子
ここかしこ葉つぱに遊ぶ夏の蝶　れい子

洋館は明治以降日本建築界の基礎を築いたジョサイア・コンドルの設計で陸奥宗光の邸宅の跡地に建てられた。当初は虎之助夫妻の自宅として、また、賓客の接待用として使用されていた。その後、古河財閥の迎賓館として利用され、昭和五十七年文化財の指定を受けた後に現在の大谷美術館として公開されている。外壁は黒々とした本小松石の野面積み、屋根はスレート葺き、全体的に野趣と重厚さあふれたスコットランドの山荘風のデザインとなっている。一階は洋風のダイニングと応接間、二階は畳敷きの和室で私的な空間となっており和と洋の表情を持った洒落た建物である。

洋館の白き出窓に薔薇の風　清秀
薔薇の庭古き館へ馬車の道　陽子
コンドル氏西洋館の赤い薔薇　由利

洋風庭園は、石段に手すりが設えられ薔薇園のテラスが階段状に連なり、一段目の花壇は正しく左右対称、二段目は方形の植え込みとなり絵画的な景観となっている。また、北東部の斜面の突出部は欠けていてコンドルの創造的なデザインが現れている。ここに約百種

百九十九株の薔薇が綺麗に植えられており、華やかに咲き誇っていた。続いて三段目はツツジ園となり奥に広がる日本庭園との連続性を持たせている。

日本庭園は京都の造園家七代目小川治兵衛の作になる泉池回遊式庭園である。鬱蒼と茂った樹木の中に心字池を中心に、急勾配を利用した大滝と枯山水を取り入れた枯滝が配され、池を眺める要として伊予の青石の船着石、さらに築山を背景に大きな雪見燈籠が並ぶ。また、心字池と大滝の間には入母屋造りの茶室があり、茶の湯が開かれると言う。滝の音が聞こえ深山の渓谷の趣を上手く演出しており心洗われる。池のまわりには花菖蒲が其処此処に咲き出していた。

夏蝶や三歩で渡る石の橋　　正規
池の面を覆ひて優し若楓　　周二
あめんぼう日差しに消ゆる心字池　　素山
園丁は乙女二人や花菖蒲　　さち子

園内の売店では人気の食用バラを練り込んだバラアイスが売られていた。バラの香りを楽しみながら木陰で並んで味わう、ゆったりとした気分の一時を過ごす。

散策が終わり庭園をあとにする。俳句会場は直ぐ近くの北区滝野川会館の集会室を予約している、昼食も同会館のレストランで済ませ、いよいよ作句に取り組む。いつもの様に三句出し四句選で行い恙なく終了した。

句会の後、一足伸ばして近くの平塚神社に参拝する。この神社の御祭神は八幡太郎源義家で奥州遠征の時に訪れ、その時に領主が義家から賜った兜を平塚（ひらづか）に埋めて祀ったことがその名前の由来である。実は参拝のもう一つ目的は、門前にある「平塚亭」のみたらし団子である。内田康夫の推理小説に登場しており、また、テレビドラマのロケ場所にもなって有名である。店頭に並ぶ団子は見るからに美味そうで、皆さんお土産に買い求める。その後、神社のお参りも忘れずに行って無事に散会となった。

■ かさね吟行会 ■

日時　二〇一九年八月九日（金）
場所　東京港野鳥公園
集合　ＪＲ大森駅　十一時
申込　森岡陽子宛　(03)３７１２・２８３５

『酔いの徒然』（八八）

丸山酔宵子

『花の御寺　長谷寺』

ＪＲ東海の「うましうるわし奈良」キャンペーンに触発されたわけではないが、平成も終わりの４月末、聖なる初瀬山に広がる美しい花の御寺（みてら）長谷寺へ。令和ゴールデンウイークを目前に控え、晴れ渡る昼前の大和路は、参拝客で超々満員ラッシュアワー。仁王門に向かう参道にはお土産店や和菓子店などが軒を連ね、名物「草餅」（ヨモギ餅）が焼ける香りが食欲をそそる。

仁王門をくぐり、正面には清々しい「登廊（のぼりろう）」が真っすぐ伸びて、その両脇に広がる花壇には絢爛と咲く牡丹。例年４月から５月にかけて「長谷寺牡丹まつり」が開催され、何とも華やかな色とりどりの大輪が、なんと１５０種７０００株が咲き誇っている。

３９９段のなだらかな石段は本堂まで続き、その先に十一面観世音菩薩がある。室町時代に製作された重要文化財の仏像、なんと全長10メートル18センチ、国内最大級の木造仏である。

本堂を一周する程の長蛇の列に並びやっと本堂に入ると、ひと匙お香が渡され手で擦り合わせると何とも品のいいシナモンの香りが広がってくる。更に進むと、色鮮やかチャーミングなお守りブレスレット「五色紐」が渡され、手首に携えて本尊へ。いよいよ、暗がりの中でのご本尊とのご対面であるが、まず目の前に飛び込んでくるのは巨大な御足（みあし）。垂直に視線を恐る恐る天井に移していくと、これまた巨大なご本尊の全容を目の当たりにし、驚愕、絶句。老若男女の渾身の祈りの列に並び、ようやくその御足に直接触れたのである。大きな御足は何百年渡って善男善女によって丁寧に摩られ、艶やかな輝きを放っている。

長谷寺は「初瀬詣（はせもう）で」として平安時代に

は高貴な人々の参詣が流行し「源氏物語」「枕草子」など多くの古典にも取り上げられている。

日本全国に長谷寺（はせでら・ちょうこくじ）或いは長谷観音と言われる寺が２５０程あるが、紫陽花寺（あじさいでら）として有名な鎌倉長谷寺、信州更級の長谷観音とともに「日本三所長谷観音」と言われている。

登廊（のぼりろう）牡丹の先に観世音

酔宵子

楽しい時間　81

2019年6月30日

山本紀久雄

神にならなかった鉄舟・・・その十一

二世五姓田芳柳は聖蹟記念絵画館壁画の「下絵」を描くにあたって、明治神宮奉賛会理事の水上浩躬（みなかみひろみ）とともに、各種の史料・資料を確認し、また各地を視察するなどの「取材」を行っている。水上浩躬は、文久元年（1861）に熊本で生まれ、明治38年（1905）に神戸市長となり、明治42年（1909）神戸市長辞任後、大正4年（1915）54歳時に明治神宮奉賛会理事に就任し、絵画委員会の事務局として聖蹟記念絵画館壁画作成に関する実務を取り仕切った。

その水上浩躬が「下絵」の取材方法について『歴史地理』（大正11年1月1日発行）で「壁書題選定の経過及其成果（1）」と題して以下のように述べている。

《下絵の調整なり、是は前項説明書に依るは勿論なれども、現場視察も亦忽諸（こつしょ）（注　軽んじること）に付すべからず、特に京都御所の内容は一般書家の想像を容さざるものあれば、其年五月藤波子先達の下に、予は五姓田氏及帝室編修官輔上野竹次郎氏と共に、京都の内外を巡視せり。其間御所及二条城の内部までも描写撮影を許されしは、一に藤波子の斡旋の賜なり、一行は其序を以て熱田、半田、畝傍（うねび）、大阪、廣島、馬關等を巡視せり。次で六月には予は五姓田氏と共に富岡、院内、盛岡、白老、札幌を巡視せり。此西東絵行脚中書伯の手帖は、幾多の題材を以て充たされたりき。斯くして下絵の大部分は一旦調製せられたり》

《又現場視察として小委員一行は、8年7月に日光田母澤御用邸を、次て宮城を、9年3月に吹上御苑を、4月に青山御所及赤坂御苑を拝観し、恐れ多くも描写撮影を遂げ、又其前後東京市内の関係地に巡視せり》《予及書伯の二人同伴視察を挙げれば、8年10月に鹿児島、熊本、長崎を、9年5月に下総習志野を巡見せり》

東京市内へは、何度となく視察を繰り返し、また、画題に関係する様々な名家へは、数十回の訪問を重ねたという。　以上の取材の充実さを推察すれば、あくまでも国家プロジェクトの一員として二世五姓田芳流が働いていたといえるであろうし、江戸開城に関する視察・取材についても数重ね現場と史料を蒐集して下絵にしたと推察判断できる。

しかし、以上の取材方法は、現場への訪問について述べたものであり、芳柳が江戸開城の「下絵」を描くにあたって、どのような資料を収取したかについては書かれていない。

そこで当時、水上と芳柳が調べ入手したであろう「江戸開城」に関する史実を、今回、改めて調べた数冊の資料から判明したことを以下にまとめてみる。

「慶応4年（1868）3月14日の西郷・勝会談が終了すると、西郷は「これから大総督府にお伺いの上、正式に決定する」と述べ、次室に控えていた桐野利秋、村田新八を呼び入れ、明15日の江戸総攻撃延期を東海、東山両軍に下達せしめた。西郷自身は直ちに駿府に向って出発。3月16日に駿府に至り、大総督宮に徳川氏謝罪の箇条書きをご覧に入れ（この箇条書きの内容については来月詳述する）、西郷は京都に上り、19日、これを朝議にかけ、その結果、朝廷においても慶喜の死一等を減じ、徳

川氏より差し出した謝罪嘆願書を許可することにした。

西郷は駿府に引き返し、大総督宮に復命し、大総督宮は東海道先鋒総督橋本實梁、同副総督柳原前光を勅使として朝命を徳川氏に伝達することにした。斯くして4月4日に勅使の江戸入城となったのである。

4月4日、勅使橋本實梁、柳原前光は、池上本門寺の本営を出て、参謀は海江田信義、木梨精一郎、安場一平、そこに大総督参謀の西郷など、一行の総人数は60名に達した。勅使と海江田参謀の服装は烏帽子直垂であった。

迎える徳川方は、高家は衣冠、その他の諸役は袱紗袷、麻上下にて、二重橋内に迎え、田安中納言慶頼は勅使を式台に迎えて、大広間の上段に導き、自らは下段にかしこまった。西郷以下官軍参謀、並びに徳川家の若年寄大久保一翁等20余名も下段に列し、ここで勅使は田安慶頼に朝命を伝達した」

二世五姓田芳柳の下絵は3枚、①「江戸開城（玄関前）」、②「江戸開城」、③「画題無記名」であるが、史実を明示しているのは、次の②「江戸開城」であろう。

絵の下段には「若年寄大久保一翁」「柳原」「橋本」「田安大納言」「西郷其他」と書かれているように、今回、改めて調べてみた史実と合致している。

では何故に①と②の下絵が選定されずに、以下の③「画題無記名」が壁画として聖蹟記念絵画館に掲示されたのであろうか。これについて、水上浩躬は「壁書題選定の経過及其成果（2）」（『歴史地理』（大正11年2月1日発行）で以下のように記している。

《正面より描写するときは余り表面的に流れ、側面より描写する方却て其真相を現はすに妙なるものあり、斯る書題は御身辺の遠近に拘はらず側面描写に據れり、江戸開城に関し江戸明渡の場を排して、薩摩邸談判の場を擇みしが如きは、其例の顕著なるものなり》

なかなか難しい述べ方で、理解が難しいが、西郷と勝の対面場面の方がわかりやすいから採用したのだと解釈し、理解するならば、これは「フィクション」になるのではなかろうか。

川井知子氏は「明治神宮聖徳記念絵画館研究」（『哲学会誌』第21号平成9年11月学習院大学哲学会）で《絵画館の造営の背景に「歴史」を作ろうという動機があった》と指摘し、こう述べている。

《断片的な細部の合成によって、壁画全体―フィクションを、ノンフィクションとして成り立たせようとする制作方法である。フィクションをノンフィクションらしく成立させる拠り所となったのが、写真であり、種々の「実物」であり、出来事の再現であった》

この川井氏の指摘を受け入れるならば、確かに慶應4年3月14日に薩摩邸で西郷と勝が会見したことは事実としての「出来事」であるから、この会見があったことはノンフィクションであるが、描写は想像による「断片的な細部の合成」でフィクションと判断できよう。

絹の話（105）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹の来た道　これからの道　（その5）

絹の多角利用

絹は今日まで数千年に渡り高級な繊維として利用されて来ました。ところが30年ほど前東京農工大学の平林教授により、食べるシルクが発表されると、にわかにその方面の研究が各研究機関で盛んになって来ました。時を同じくする様に昆虫機能や蚕の遺伝子組み換研究が脚光を浴びて来ました。

食べるシルク

その様な時代、絹織物の盛んな滋賀県長浜では屑糸等の有効利用を模索していました。京都の加悦町では第3セクターを立ち上げ、加水分解したシルクパウダの発売を始めました。それはシルクを食べると体脂肪減、高血糖値抑制、痴呆症予防等が期待されると云う夢の様な効果を期待するものでした。その後酵素分解法などが開発されましたが、シルクパウダの分子の連鎖の大小で上記の効果が著しく異なる事が判明して、塩化カルシューム溶解法などが開発され、メタボ対策用、高血糖値抑制用など用途に応じたシルクパウダが作られる様になってきました。昨今では機能性食品として高血糖値抑制のための美味なサプリメント等が販売されています。

また宇宙飛行士用食品開発にも注目されています。

私は「ヤセヤセ缶ジュース」の様な手軽なシル入り食品が一般化して来る事を期待しています。

無菌培養養蚕

蚕の人工飼料が開発され、年間何度でも工場で繭生産出来る事業が、蚕新産業の要請を受け、軌道に乗って来ました。飼料が高価なのでさらなる努力が必要です。

医療品開発

蚕は家畜化された18種類の必須アミノ酸を作る昆虫で、生命のサイクルが30日弱と短いので、試薬実験動物に多用されるようになりました。無菌培養された蚕からインターフェロン等が作られています。また無菌培養シルクを使った化粧品は年々愛好者が増えています。

今やシルクは簡単にパウダやゲル、高野豆腐の様な固形物にして保存し、何時でも目的に応じて利用出来ます。シルクは医療素材に使用しても拒否反応がありません（シルクアレルギーは稀に存在）。古くは手術の抜かない縫合糸からはじまって、今日では骨や皮膚、血管まで作

られる様になり、法整備が進みコストが安くなれば、絹は親和性が高いので長期リハビリの要らない医療資材が現実の物になろうとしています。

蜂の巣もシルクですが、糸は採れませんのでゲル状の爪ケアー用品が売り出されました。２０２０のオリンピックに日本のバレーボール選手が使用する事になりました。

工業製品の開発

シルクはプラスチックやビニールシートの様にもなります。脱プラスチック時代を受けて防腐効果の高い皿やストローが使用後には健康維持食材としても利用できる様になるでしょう。野菜などにシルクを被せておくとしおれが遅くなります。その様な事から鮮度維持容器などにも利用される日が来るでしょう。

また内装材としても有効です。シルクの壁は人の気持を和やかにしてくれます。昔から貴賓室などにシルクを壁に使用するのはその為です。火災の時も強力な耐熱効果を発揮し延焼を遅らせ、有毒ガスの発生も有りません。

蜘蛛の糸もシルクです。細くて、軽く張力ではシルクよりはるかに優れています。大腸菌に作らせた蜘蛛の糸製造が日本で成功し、世界の注目を浴びています。

紫外線が当たると数時間ではあるが強度を増し、刺激を受けると強く収縮する（捕獲糸）繊維は他に例が有りません。今後の研究が待たれます。

貝絹とは貝の紐や貝が岩にくっ付く成分です。この生態研究で水中接着剤が開発されましたが、まだまだ沢山の機能性が隠されていると思われます。

遺伝子組み換え蚕

遺伝子組み換え技術が急速な進歩を遂げ、蛍や珊瑚の遺伝子を持った蚕が青白く光る糸やオレンジ色に光る糸を作る事に成功し、一般飼育が始っていますが、カルタヘナ法で蚕の糞や残食の処理が厳しく規制されていて、確たる処理方法が確立していないので、今後の発展が危惧されています。

昆虫機能開発

蚕の脱皮ホルモンやヨウジャクホルモンの調整でニワトリの卵大の繭も、スズメの卵くらいの小さな繭も自在に作る事も出来るようになりました。

ヤモリはなぜガラス板を垂直に登れるか。蝉の羽はどうして汚れないか、なぜ玉虫の羽根の色は退色しないのか、アブラムシの匂いセンサー等の研究に専念して未来産業につなげようとしている研究者が増えています。

ヤママユガ科の繭の多孔質繊維の数々の未解明機能性の研究は急務です。

「江上浩二の独り言」20

江　上　浩　二

28年前の美辞麗句と今の現実

部屋の断舎離をしていると色々なものが次から次へと現れる。ちょうど28年前の、15×10㎝位の新聞記事の切り抜きには笑ってしまった。以下に示す。これは一般紙でなく、業界誌の若い記者に頼まれ、取材に応じ、美句に包まれた私の若い時の健康法になった。

（ある外資系の社名）の江上浩二さん（38歳）は「気分転換を促進しながら、心身の健康を保つ」を目標に週３回早朝７－８㎞のジョギングを行っている。学生時代に陸上競技部で鍛えた脚力にまかせ「休日などは気分が乗れば、つい山手線沿線を16－17㎞走ってしまうこともある」とか。朝の陽光をさんさんと浴び、杜（もり）の中を駆け抜ける日課は「すがすがしい」のひと言に尽きるそうで、もう15年以上も続けている。

◎・・・私の自宅は東京都北区田端。ジョギングのコースは近くの六義園（東京都文京区の都立庭園）から護国寺（東京都文京区）へ回ったり、六義園から飛鳥山公園（同北区）に向かったり。湯島（同文京区）なども良いコースだ。休日には、気分が乗って皇居に向かい、そのまま一周（約５㎞）したり、品川駅まで突走ることもあった。体調と相談して週三回程度にしているが、飽くことなく走り続けられるのは、意欲をそそるさわやかコースをたくさん知っているせいだと思う。

◎・・・中学、高校時代は出身の神奈川県で、大学時代も陸上競技郡に席を置いて短距離走者として走り込んできた。ジョギングを早朝の日課とするようになったのは大学四年のころから。陸上競技部の選手として走る距離が少なくなり出して、自主トレーニングが必要になったためだ。

午前五時半からストレッチ体操を開始し、平日は一時間程度走る。夏は朝日を浴びられるが冬はまだ夜明け前。仕事でフランスや米国に出張しに際も忘れずにこなしている。

◎・・・お陰さまで身長（１７７㎝）に適した体重67㎏

を維持している。適度な食事量を守っているせいもあって体調は常に良好。カゼもひかない。さらに、日曜日はわが子に付き添って水泳もやっている。１５００ｍを２時間かけて泳ぐ。こちらはキャリアが約八年。さわやかに鍛えた心身は仕事にも反映している。

食事は朝、昼、晩の三食。たんぱく質を多めに取るようにしているが、朝食の際、鶏卵は控える。体重維持（70kg以下）を健康の目安に家人がバランスの取れた食事メニューを心掛けてくれるので心強い。

66歳になった現実と比べてみたい。時間的行動はあまり変わらないが、朝はもう少し早い。当時では血圧は１３０位であったが、コレステロールが高く、健診の食事チェックであなたはタンパク質の取り過ぎと言われ、卵抜きとなったが、今は医学の事情が替わり普通に卵を食している。その後というより還暦を過ぎて３年前より血圧を下げる薬を処方されるようになり、１４０を越えてしまった血圧は１２０程度を維持している。適量を走るのは良いが走り過ぎ、坐ってする仕事が長くなって、膝、腰に良くない。特に腰痛には悩まされている。若い時の健診で脈拍数が少なく、スポーツ心臓ですかと言われたが、なんていうことはない、現在の診断は不整脈と心電図異常。走るのは避け、今はwalking、時々軽くjoggingが出来る程度に落ちぶれている。でも、風邪をひかないのは確かだ。最近のインフルエンザ流行でも平気、罹患した家内が横に居てもインフルエンザにはならなかった。　当時でも皇居ランはあったが、カラフルな一般のランナーは極めて限られ、同好会や経験者が多かったようだ。確かに時代は変わっている。

令和元年６月初旬記す。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田勇気

2019年7月3日

この時期にギックリ系？

「湿度100％って水の中にいるのと一緒ですよね」
と笑いながらやってきた患者さんの
笑顔が素敵でした
湿度は暑くカビの原因の一つになりますが
肌には優しいですよね
最近
風邪っぽくないけど風邪？
という症状が多く出ています
喉の違和感
鼻水
咽る咳
倦怠感
頭痛
肩の張り

これらは1か月単位で長引きます
しかも
ギックリ系が流行ってきております
もどきが多いのですが
抜ける方もちらほらと出ています
これらの症状にいえることは
とにかく内臓を温める事
エアコンなどで身体は冷えるので
暑いからといって湯船につからなかったり
氷の入った冷たい飲み物を
飲むのも良くありません
寝入りばな　ゆたぽん　を
1分でもいいので
お腹に乗っけてみて下さい
もう一度
身体を労わって行きましょう

2019年7月8日

熱中症予防　曇りと晴れの違い

梅雨らしい気候で
なんだかほっとしています
週末から気温が上がるらしいので
熱中症に要注意です
なぜ熱中症が怖いのか？
熱中症になりますと
その時だけではなく
夏中
熱中症を再発しやすくなります
そのまま冬になっても
体調がいまいち回復せず
ウィルスに感染しやすくなります
ですので
ならないのが一番いいんです
先ずは
メインとなる水分を
水→ミネラル分の多い麦茶
に変えるのがお勧めです

もちろん
汗をかきすぎている場合は
体調が良くない場合は
経口補水液やスポーツドリンクを利用しましょう
服装なども
首回りが暑くならない様に
風通しの良いものを着て
汗を蒸発させやすくしていきましょう
なんかおかしいな
と思ったら
首の後ろや脇の下
などを保冷剤などで冷やしましょう
梅雨時などは良いのですが
天気のいい日は
汗の拭き過ぎに気をつけましょう
なるべく汗を
蒸発させるようにして体温を下げましょう
部屋の気温や湿度などもチェックして
気がついたら・・・
という事がない様にしていきましょう

漢詩研修（三十四）

千代田岳精会　平井茂行

大津皇子と漢詩及び和歌～日本漢詩のルーツ

「詩賦は大津皇子より興れり」即ち日本での詩賦の隆盛は大津皇子から始まった」（日本書紀持統天皇の条）

六六三年（天智天皇二年）－六八六年（朱鳥元年）十月。『日本書紀』によれば天武天皇の第三子（懐風藻では長子とされる）。母は天智天皇皇女の大田皇女、異母兄に草壁皇子（母はのちの持統天皇）。

我が国で現存する最古の漢詩集『懐風藻』（七五二年）には、大友皇子二首、河島皇子二首に次いで三番目に大津皇子四首が収録されている。懐風藻によると「状貌魁梧、器宇峻遠、幼年にして学を好み、博覧にしてよく文を属す。壮なるにおよびて武を愛し、多力にしてよく剣を撃つ。人多く付託す」と記している。しかし大津が4歳頃母の大田皇女が死去し後ろ盾が乏しかったため、異母兄の草壁皇子が六八一年（天武天皇十年）に皇太子となった。

六八六年（朱鳥元年）九月に天武天皇が崩御すると、同年十月に親友の河島皇子の密告により、謀反の意有りとされて捕えられ、翌日に磐余（いわれ）にある訳語田（おさだ）の自邸にて自害した。享年24。

「懐風藻」に収められている漢詩は「春苑ここに宴す」「遊猟」「志を述ぶ」「臨終」の四編。

五言絶句「臨終」と、同時に詠まれた万葉集にある和歌。

金鳥臨西舎　金鳥（きんう：太陽）西舎に臨み
鼓聲催短命　鼓聲（こせい：時報の鼓の音）短命を催す（せき立てる）。
泉路無賓主　泉路（せんろ：死の旅）賓主（ひんしゅ：主人と客人）無し。
此夕離家向　此の夕家を離（さか）りて向かふ。

大津皇子、被死（みまか）らしめらゆる時、磐余（いはれ）の池の陂（つつみ）にして涕（なみだ）を流して作りましし御歌一首（巻の三）

百（もも）づたふ磐余の池に鳴く鴨を　今日のみ見てや　雲隠（がく）りなむ

大津皇子の姉大伯皇女のよんだ和歌

大津皇子、ひそかに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時大伯皇女の御作歌二首。

わが背子を　大和へ遣（や）ると　さ夜更けて　暁（あかとき）露にわが立ち濡れし（巻二105）
二人行けど行き過ぎ難き秋山を　いかにか君が独り越えらむ（巻二106）

弟の悲報を聞き、藤原京へ立ち戻ったときの歌

大津皇子の薨（かむあが）りましし後、大来皇女伊勢の斎宮より京に上る時の御作歌二首。

神風の伊勢の国にもあらましを　なにしか来けむ君もあらなくに（巻二163）
見まく欲（ほ）りわがする君もあらなくに　なにしか来けむ馬疲るるに

大津皇子の屍（かばね）を葛城の二上山に移し葬（はぶ）る時に、大伯皇女の哀しび傷（いた）む御作歌二首。

うつそみの人なる我（われ）や明日よりは　二上山（ふたかみやま）を弟（いろせ）と我（あ）が見む
磯の上に生ふる馬酔木を手折（たお）らめど　見すべき君がありと言はなくに

『奥の細道　奥州へ　其二』

中屋保之

元禄二年四月下旬に、勿来（常陸）・鼠の関（羽前）と共に奥州三関の一つである白河の関にやってきた芭蕉は、いよいよ奥州に足を踏み入れた。

「便あらばいかで都へ告やらん　けふ白川のせきはこゆると」は平兼盛の歌（『類字名所和歌集』）である。また、能因法師の歌「都をば霞と、もに出しかと　秋風そふくしら河のせき」に敬意を表し、この関を越えるにあたって衣服を改めたという竹田大夫国行の故事がある。芭蕉一行には整える衣もなく、せめて卯の花を頭にかざしてこの関を越え、奥州へと向かう覚悟をしたのであろうか。

（須賀川　元禄二年四月二二日～二九日）

兎角して越行ま、に、あふくま川を渡る。左に会津根高く、右に岩城・相馬・箕張の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かけ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらす。すか川の駅に等躬といふものを尋て、四、五日と、めらる。先「白河の関いかにこえつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うはゝれ、懐旧に腸を断て、はか〳〵しう思ひめぐらさす。

風流の初やおくの田植うた

須賀川宿の駅長であった相楽等躬（本文では「窮」を使用している）は、芭蕉の先輩格の須賀川俳諧の宗匠であった人物。その等窮から、白河で詠んだ句を問われ、咄嗟に披露したのがこの句である。長旅に心身もつかれていたであろう芭蕉一行は、美しい風景に夢中になったり、古来の詩人たちのことなど思い出されて、《四、五日とゞめらる：》どころか、須賀川には七泊八日の長逗留をしたという。

無下にこえむもさすかにと語れは、脇・第三とつゝけて三巻となしぬ。この宿の傍に、大きなる栗の木陰を、たのみて、世をいとふ僧有。「橡ひろふ太山もかくや」と間に覚られて、ものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字は西の木と
書て西方浄土に便ありと、
行基菩薩の一生杖にも

柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

「世をいとふ僧」である蕉門の可伸は「大きなる栗の木陰」の下で世を捨てた生活をしていた。可伸は、俳諧をする僧ということで、外見は芭蕉とそっくりだったとか。旅の途中でこのような隠棲者然とした可伸に出会って芭蕉はうれしかったようである。

可伸は、俳諧集『伊達衣』（等躬編）の中で

予が軒の栗は，更に行基のよすがにもあらず，唯実をとりて
喰のみ成しを、いにし夏、芭蕉翁のみちのく行脚の折から、
一句を残せしより、人々愛る事と成侍りぬ

と述べている。

梅が香を今朝は借すらん軒の栗　　須賀川栗斎可伸

（佐藤庄司旧跡　元禄二年五月二日）

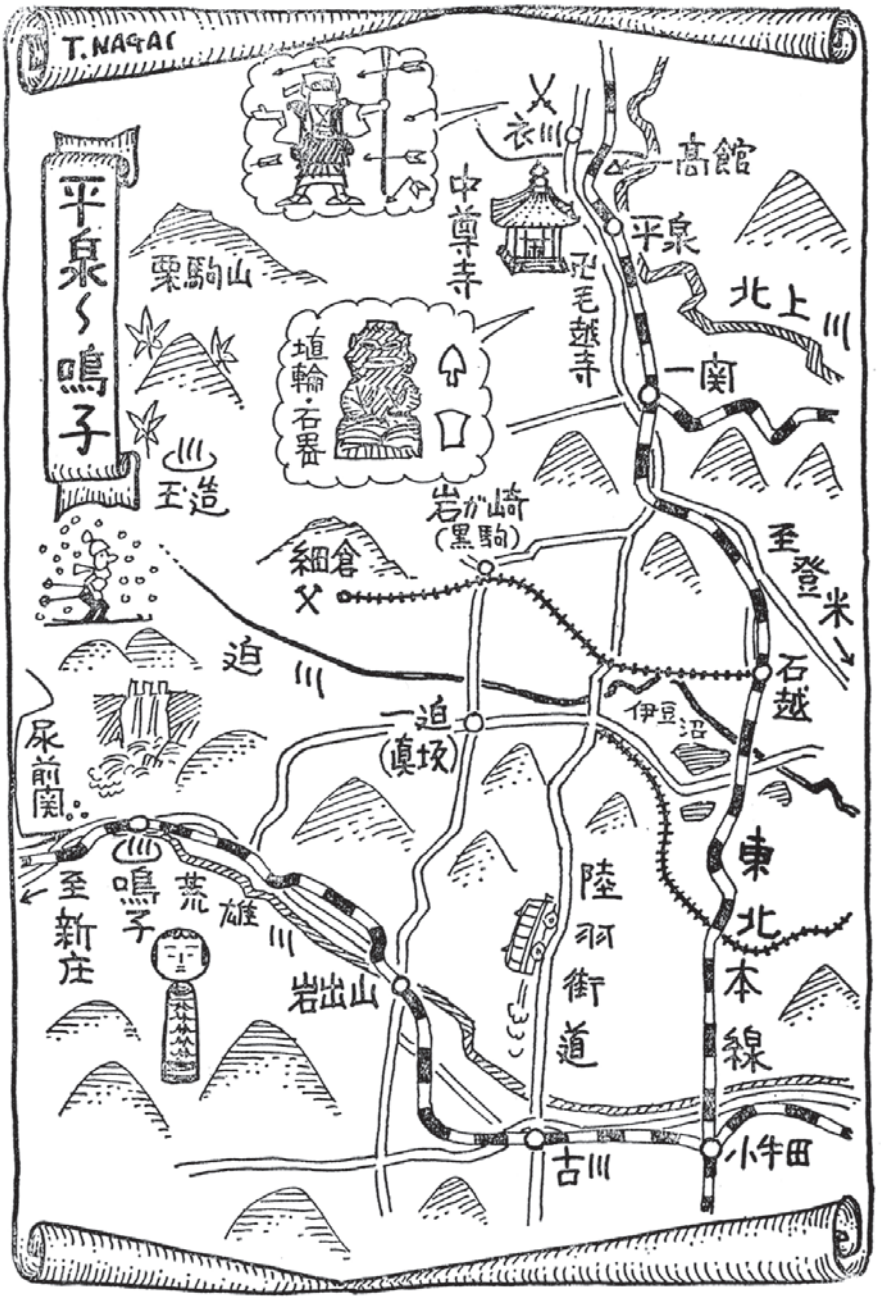
月の輪の渡しを越て、瀬の上と云宿に出つ。佐藤庄司が旧跡は、ひたりの山際一里半計に有。飯塚の里、鯖野と聞て、尋〳〵行に、丸山と云に尋あたる。是庄司か旧館也。麓に大手の跡など、人のをしゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁かしるし、先哀也。をんなゝれともかひ〳〵敷名の世に聞えつるものかなと袂をぬらしぬ。堕涙の石碑も遠きにあらず。寺に入てちやを乞へは、爰に義経の太刀・弁慶か笈をとゝめて什物とす。

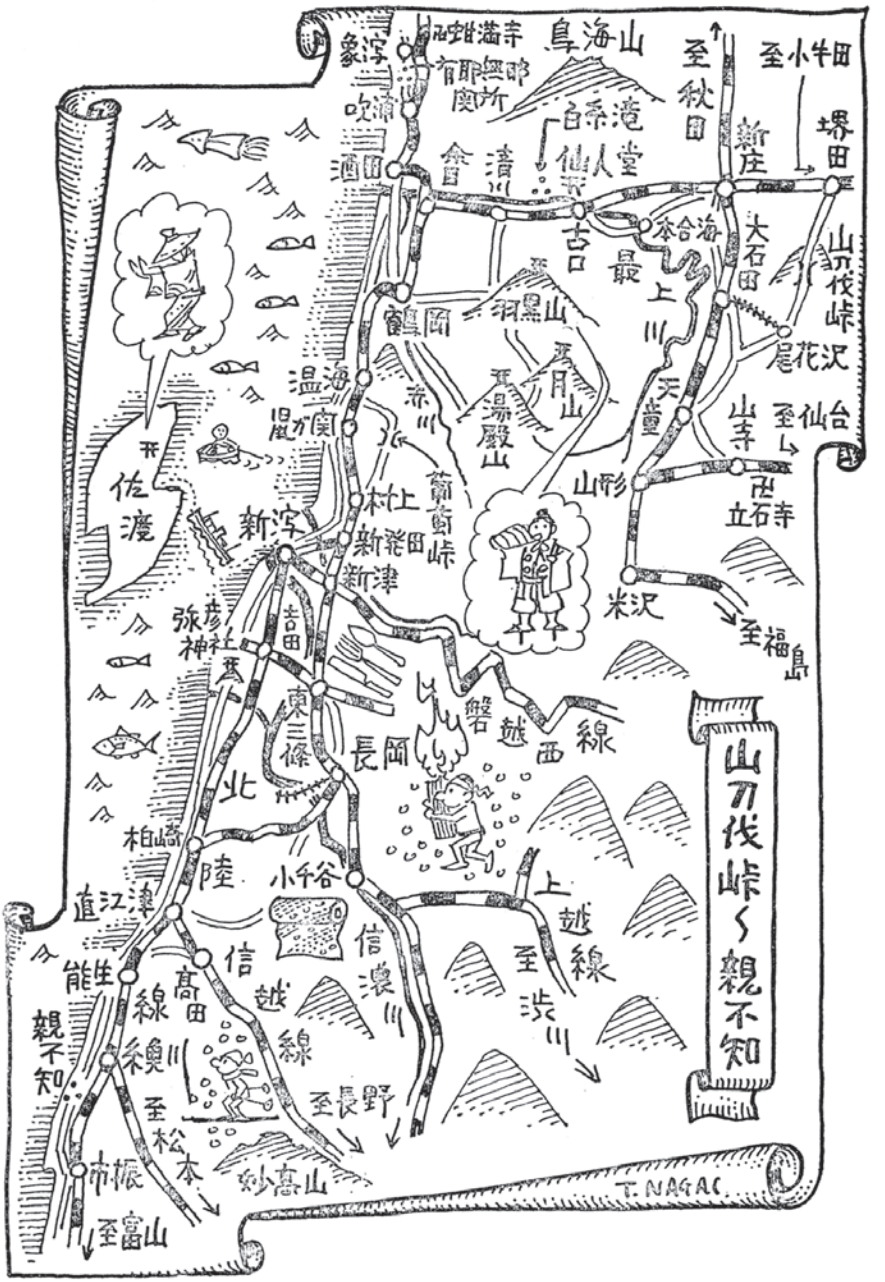
笈も太刀も五月にかざれ帋幟

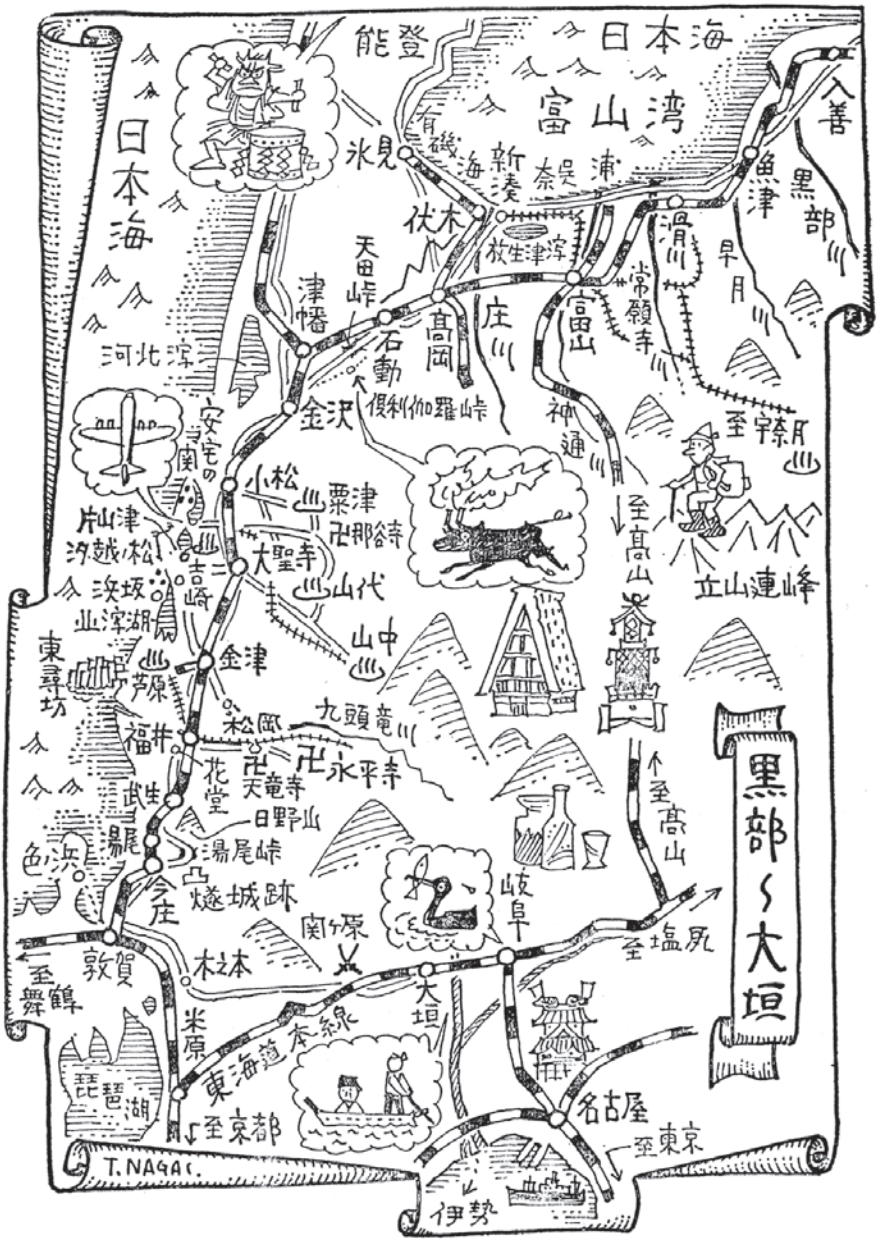
五月朔日の事也。其夜、飯塚にとまる。温泉あれは、湯に入て宿をかるに、土坐に筵を敷て、あやしき貧家也。ともし火もなけれは、ゆるりの火かけに寝所をまうけて臥す。夜に入て、雷鳴、雨しきりに降て、ふしたる上に雨もりて、蚤蚊にせゝられて眠らす。持病さへおこりて、消入計になん。短夜の空もやう〳〵明れば、又旅立ぬ。猶夜の余波、心すゝます。馬かりて桑折の駅に出る。遥なる行末をかゝえて、斯る病覚束なしといへど、「羇旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなん、これ天の命なり」と、気力聊とり直し、路縦横に踏て伊達の大木戸をこす。

佐藤庄司の館跡を訪ねた芭蕉は、義経の太刀や弁慶の笈などを見て、これから訪ねる平泉の悲劇に思いをはせたのであろうか。

《参考文献　吉川弘文館　松尾芭蕉と奥の細道　佐藤勝明　岩波文庫　奥の細道上野洋三・櫻井武次郎　など》


T. NAGAI
平泉〜鳴子
衣川
高館
中尊寺
平泉
毛越寺
栗駒山
北上川
一関
埴輪・石器
玉造
岩が崎
(黒駒)
細倉
至登米
迫川
石越
伊豆沼
一迫
(真坂)
尿前関
鳴子
荒雄川
至新庄
岩出山
陸羽街道
東北本線
古川
小牛田


山刀伐峠く親不知
至秋田
至小牛田
堺田
新庄
山刀伐峠
大石田
尾花沢
台仙
至山寺
立石寺
米沢
至福島
海山
滝人堂
白糸
仙人
清川
古口
最上川
天童
山形
月山
羽黒山
湯殿山
鶴岡
海岡
温海
温泉
佐渡
新潟
村上
新津
節峠
吉田
弥彦神社
東三條
長岡
磐越西線
上越線
至渋川
小千谷
柏崎
陸
直江津
能生
親不知
高田
信越線
信濃川
至長野
糸魚川
至松本
妙高山
市振
至富山
T. NAGAC



（参考文献　大竹新助著・奥の細道・カラーブックス88）

「夜を利用する」

大橋望彦

夜に寝られなくなれば、何かすればよい。「七・三」の人生に成りはしないか。実際に是を始めて見た。そう簡単ではなかった。昼間の居眠りは、夜寝るように深く寝るのと異なり、ウトウトと浅い眠りが続いており、眠った実感が薄い。其れに昼間の起きている間は、昼行燈（ひるあんどん）の様にボンヤリした思考能力の少ない状態が続くみたいである。それでは時間の無駄使いであり、あまり意味をなさない。これでは駄目なので、夜に期待しようと考えた。所が、夜は恐らく眠くなる事も予想されるので、コーヒーとか紅茶などを飲み、眠くならないよな算段をしておいた。それには原稿書きが一番適しているように思えた。さて、実際に夜起きて何かをしようと張り切ったところ、確かに寝ずに済んでいるものの、文章が浮んで来ずに、只ボーとしているばかりである。これでは何の意味もない。コーヒーを飲んで床に入った。なんと、ぐっすりと朝まで熟睡してしまった。

よく国際線で旅行すると、時差ボケという厄介な時間のずれを感じる。これが正に身体全体に対する外部的、内部的生体リズムへの影響であり、どのリズムが変わっても何らかの影響が体の中に生じる。リズムが刻々と生体反応を刻んでいる時間軸で表すのが通常であるが、一日24時間を一周期として繰り返している現象を12時間ずらすと、丁度12時間経った時から同じ周期が始まる筈である。ところが、生体リズム（周期）はそのように簡単にずれてくれないで、生体リズムを構成しているある現象は4時間しかずれなかったり、あるものは6時間しかずれなかったりで周期が生体リズム（周期）を構成している現象毎に、バラバラになってしまったりする。そうなると、前の様にきちんと揃った生体リズムに戻るためには新しい時間を認識、設定したりして、多くの時間を要してしまう事となる。即ち、これまでのずれが時差ボケという現象として現れる。

昼夜のずれは、もっとややこしいのかもしれない。何故ならば、余りにも全てのバイオリズムのずれが24時間に合わさるにも時間が掛かるからである。

やれやれ之では駄目か、と、思い出した頃に、丁度病院に長期間入院する事となった。何もすること無く、一定曜日（火、木、土）に、昼間の4時間を透析でジィーとしていなければならない。この4時間は中々長い。

「クズ」あれこれ

夏目勝弘

週に二回ほど電車に乗る、車窓よりの景観が日に日に変化してゆく、休耕の畑が、ソーラパネルの黒一色の広がりとなってしまう。

冬はホトケノザに始まり、ヒメオドリコソウの群生が淡いピンク色の休耕の畑を、ソーラパネルの、間あいだに見つつ、季節の移り変りを感じつつ、見馴れた車窓からの風景を楽しんでいる。

五月に入ると冬田に耕運機が入り、水が引き込まれるようになり、水の張られた田の面には、白サギや、青サギの立つ姿が見られる。

そして鉄路の法り面や、空地には緑の色が少しづつ増えてくる。

クズの蔓先が叢から伸び出し、巻き付く物体を風に頼みて、宙に揺れている。

万葉集の巻七に（をみなへし佐紀沢のべのま葛原いつかも繰りて我が衣に着む）と、クズを利用している。

たぶん縄文人も利用していたであろう、クズについて調べてみたくなった。

漢字名、葛。別名、うらみ草。原産地、日本在来種。つるで十メートル余のびる。分布は日本全土。花言葉は、活力・芯の強さ・治癒。

クズは昼寝をする植物として知られている。光が強すぎると光合成の能力を超えてしまうため、夏の日の盛りには葉を上へ立てて閉じてしまう。夜になると、葉から水分が逃げるのを防ぐため、逆に葉を垂らして閉じる。

別名の「うらみ草」は昼寝をしているときは葉の裏側が見えるため。

安倍晴明の母親が清明に残した歌が（恋しくば尋ねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉）「うらみ」が「恨み」と「裏見」。

花はブドウの香り、どちらかというと、グレープの炭酸飲料の香料の香り。

薬草として、根の皮をはぎ、適当に切り乾燥したものを、カッコンと呼び、漢方で発汗、解熱、緩和薬、ふだん健康な人の頭痛や肩こりをともなう感冒には卓効をきたす。カッコン湯。その他乾性の皮ふ病、小児はしか等々まだある応用範囲がひろい。

生薬の産地は、大阪・三重・奈良・富山・福岡・熊本。

デンプンは、奈良・京都・福井・高知・福岡等の各県で良質なものを産する。

葛布は、質強く水に耐え、雨具・袴などに、襖などに貼る。名産地は、静岡掛川。

万葉集から現代までの短歌を記してみる。

○はふ葛の絶えずしぬばむ大君の見ししの野辺には標結ふべしも（大伴家持）

クズの蔓

○葛の葉ののびあまりたる太蔓のながながし蔓をふみこえにけり（吉植庄亮）

クズの葉

○葛の葉のあかきもみぢのひるがへる谷あひゆきぬ真昼にちかし（斉藤茂吉）

○蔓草の葛はへるみゆ丘の原笹むらわけてわれ入らんとす（木下利玄）

クズの花

○みねの風けふは沢辺に落ちて吹く広葉がくれの葛の白花（若山牧水）

○すでに花をはりし葛のしげりあり見つつ居るとき風もふかなく（佐藤佐太郎）

○夏葛の絶えぬ使のよどめけば事しもある如おもひつるかも（万葉集　大伴坂上郎女）

（参考文献）雑草手帳、稲垣栄洋、東京書籍、万葉集、土屋文明、河出書房新社、原色日本薬用植物図鑑、木村孟淳・木村康一共著、植物短歌辞典、針ケ谷鐘吉、加島書店

「氷魚」のことから（223）

岡本八千代

今は、紫陽花の季。母屋から私の籠り部屋に行くのに立ちどまって空を仰ぐ。大きな雲がゆっくりと東の海の方へ動いてゆく。

紫陽花は、白花ばかり。かつて、鳴海から友だちが持ってきて植えてくれたもの。他の一種もアメリカアジサイ、これも白色。茎も細く花も柔らかくなよなよしている。もう一種は、柏葉アジサイ、これも白花で大きい。

こういう環境の中の独りの私。考えて悩むこともあり、……これが老いの幸せかもな。

さて、ここからは、「歩道」の佐藤佐太郎のことを書きたい。

佐藤佐太郎（一九〇九-八七年）は十七の時に「アララギ」の同人となり、以来斎藤茂吉の弟子となって、有名になったのは、昭和十五年（一九四〇年）に出版された歌集「歩道」によってであった。この歌集は中産階級の日常生活を描いていたが、鋭い感性と言葉に対する気づかいが見られたのであった。佐太郎は、勤めていた岩波書店を退社してまで歌作に没頭していった人。佐太郎は昭和二十二年の初頭に、

「戦が悲しい局を結んだとき、私も新しい覚悟をふるひ起して出発を誓い、作歌にも或漠然とした方向を感じつつ努力したのであった。然し実行は遅々として一向に旧態を脱し得ないままに昭和二十一年が終った。年が明けるとともに、私は決断して実生活と作歌との上に更に新しい境涯をみづから招こうとしている。」

と言って茂吉の忠実な弟子となった。

戦後昭和二十一年には、桑原武夫という人が、現代俳句に対して、「第二芸術論」をつきつけた。私もその時の実感を身を以って驚いた。私はその時、まだこれから学生として、国文学の勉強をしようとしている時であったので…。

考えてみると、やはりこの芸術論は詩歌にも及ぼして、それらの勉強を止めてしまった人もあったらしい。

しかし、佐太郎は、詩歌のように「限られた形式だからこそ表現の深さが可能になる」と解釈をして、歌の創作に励んだのであった。

佐太郎は、昭和二十七年に歌集「帰潮」を発表した。彼は、やはり伝統的な形式を守って、アララギの提唱していた「写生」の精神に則っていた歌集であった。その中の一首。

〝白藤の花にむらがる蜂の音あゆみさかりてその音はなし〟

The sound of bees
Clustering in the blossoms
Of white wisteria:
Now they habe walked away
And Their sound is heard no more.

一つの音の奥のもう一つの音を聴くのは佐藤佐太郎の歌の特徴だと言われてきた。—と。

（ドナルド・キーン著、新井潤美訳の著を参考）

編集室だより【二〇一九年六月】

今泉由利

○日本に帰り住むにあたり、住居を定めた辺りを隈なく歩きまわったりした。そんな時もかなり過去になったから、また見回わろうと思いたつ。荒川と隅田川、二つの大きな川が〝扇大橋〟一つの橋で渡れてしまうのが面白かった。橋の真中に、茅葺の蕎麦屋があり、繁く通ったのに、無くなってしまった。染井霊園、谷中霊園…先祖のお墓にお参りしていたのに…思ったところの思った場所に、なかなか行き着けない。あちこちにあった銭湯の建物が、ギャラリーやイベント場になっている。小さなギャラリーがいくつも出来、それぞれの表現をしている。どんどん時が移り、どんどん時が移ってゆくことを実感。

○編集室を埋め尽くす品々を、処分しなければ自身の居る所もなくなってしまう。とにかく溜めることばかりだったから。読み得るものを読め無くしないといけない。破りはじめてみたけれど、いつまでたっても終わらないほどある。ゴミ収集日が楽しみになる。

○旧古河庭園に俳句の吟行。
武蔵野台地の斜面、低地地形。英国人建築家ジョサイア・コンドル氏による英国貴族の邸宅にならった古典様式。スレート葺、レンガ造り、建物に合せた洋風庭園、季節毎のバラが咲く。王子七滝といわれる、この辺りの深山幽谷の趣をかもす、井戸水を水源に大滝が造られている。落付いた良い時間を過すのでした。

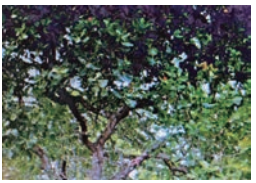
○平塚神社で教わる。
元号の起源は、前漢武帝「建元」。日本では、大化・大宝以来278の元号が定められてきた。改元の事由は、代始め、祥瑞、災異、革年など。時代に即応して選定されると。

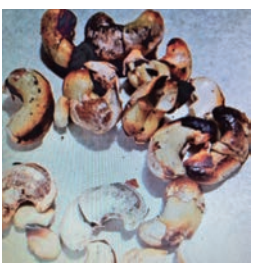
○『詩歌研究会』にて教わる。
現存する最古の漢詩集『懐風藻』には、大友皇子二首、河島皇子一首に次いで、大津皇子四首が収録されている。
百づたふ磐余の池に鳴く鴨を　今日のみ見てや雲隠りなむ
漢詩及和歌、日本漢詩のルーツに興味がわく。今は亡き父との日々が蘇る。

○還暦・六十才・とんでもないよと追い返せ。
古希・七十才・未だ〳〵早いとつっぱなせ。
喜寿・七十七才・せくな老楽これからよ。
傘寿・八十才・なんの未だ〳〵役に立つ。
米寿・八十八才・もう少しお米を食べてから。
卒寿・九十才・年令に卒業はない筈よ。
白寿・九十九才・百才のお祝いが済むまでは。
茶寿・百八才・まだ〳〵お茶が飲み足らん。
皇寿・百十二才・そろ〳〵ゆずろうか日本一。
こんなのを見付けた。自分に教える。

○国会図書館で、三河アララギ誌を見つけて下さった、矢崎直人氏が三河アララギ七月号より、短歌をお届け下さっています。礼儀正しく、素敵な青年のご参加を、よろこびます。

野菜・まんだら　（18）カシュウ
Anacardium occidentale





○原産地：ブラジル南東部、南アメリカ大陸、西インド諸島、アフリカ諸国。熱帯・亜熱帯地域

○ウルシ科：アナカルディウム属。

○常緑高木。成木は8m～15mほど。葉は20cmほど。

○花：花枝の先端に、散房群生。

○果実：カシューアップルと呼ばれ、花托が肥大して5−12cm。洋ナシ形。果実の先端に、灰褐色の殻に覆われた勾玉形の種子、カシューナッツをつける。多汁質。生食にするほか加工用として、ピュレ、ジュース、ジャム、果実酒に。
アナカルディウム酸やカルドールなどの刺激成分のアシグダリンなど毒性を含む。これらの成分除去に高温加熱による除去処理が必要。

○カシューナッツ　脂肪分、炭水化物、タンパク質、ビタミンB1、ビタミン類、カリウム、リン亜鉛などミネラル、５大栄養素を豊富にふくむ。食物繊維が豊富、骨粗鬆症、貧血、美容効果。

○牛乳や小魚と一緒にいただくと効果大。

○一日に、10粒程が適量。

○ブラジルの朝市で、山盛に売られていた。この奇妙なフルーツを、もち帰りスケッチしたのが、三河アララギ８月号の表紙。

○人間に必要なものを沢山ふくんでいるカシューナッツを、朝食に、夕方のお酒のおつまみに、自分を少しでも劣化させないよういただいている。

○そういえば、猿がこのカシューアップルを好むそうだ。猿のからだには、カシューの毒性を薬とする機能がそなわているのだろうと思う。

今泉由利

天皇陛下御即位
明治神宮秋の大祭 奉祝献詠募集要項

一、献詠歌　未発表の近詠（一人一首厳守）
一、用紙　はがきに限る
　献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる（小・中・高校生は現代仮名遣）郵便番号・住所・氏名（ふりがなを付す）・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）
一、締切日　**九月二日**（月）必着
一、選者　大下一真・川野里子・来嶋靖生・沢口芙美
　（敬称略五十音順）
一、選歌発表　**十月二十日**（日）歌会当日　於 明治神宮参集殿
一、賞　一般　特選　一〇名　記念品贈呈
　入選　二〇名　記念品贈呈
　佳作　一七〇名　記念品贈呈
一、送り先　小・中・高生　秀逸作　若干名　記念品贈呈
　〒一五一―八五五七渋谷区代々木神園町一―一
　明治記念綜合歌会係　電話〇三―三三七九―五五一一
一、献詠披講式
　1日　時　十月二十日（日）午前十時
　2場　所　明治神宮御神前
一、第百四十一回明治神宮献詠短歌大会
　1日　時　十月二十日（日）午後一時
　2場　所　明治神宮参集殿
　3歌会内容　入賞歌発表・表彰・選評
【講演】連続短歌講座《近現代歌人の家族詠》第四回
「大野　誠夫 ― 生い立ちが育む歌」　講師　古谷　智子 氏

◎会費不要
☆来会者には作品集を贈呈致します。
☆作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。
※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催　明治神宮献詠会
　　明治記念綜合歌会
　　〇三―三三七九―五五一一

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL（〇三）五九二四-二〇六五
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子
◇三河アララギ誌は毎月発行します。
◇会員・今まで会員の方。希望される方。
◇会費制　廃止。
◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。
◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
今泉由利　宛
◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。